

メルマガ 「いいテク・ニュース」 季語に遊ぶ 2023 年 1 月 25 日 (Vol.175)

「冬から新年、初春に観たい広重の名所絵と俳句」

「冬から新年、初春に観たい広重の名所絵と俳句」



歌川広重『名所江戸百景』 三十、「亀戸梅屋舗」 より

めぐり来る季節に合う名画と俳句、第八回目は前回に続き歌川広重（うたがわ ひろしげ）（1797-1858）の『名所江戸百景』から冬から新年、初春に観たい作品と俳句です。

今回は百三番「蓑輪金杉三河しま」では「長寿」「夫婦円満」の鳥である鶴を、百五番「びくにはし雪中」では肉の栄養価が高く、「無病息災」の象徴としての「山くじら（猪）」を、三番「山下町日比谷外さくら田」では羽子板でつく羽子の玉は「無患子（むくろじ）」と書き「厄払い」の音を発するとされる羽子板を、八番「する賀てふ」では神が宿る神聖な「富士山」を、三十番「亀戸梅屋舗」では他の花にさきがけて咲き、待ちわびる人々に喜びを与え、出世、開運の象徴とされる梅とおめでたい絵を選びました。

俳句とともに楽しみ下さい。

1. 蓑輪金杉三河しま (みのわかなすぎみかわしま)

『名所江戸百景』 百三



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:100_views_edo_102.jpg

百三. 蓑輪金杉三河しま | 安政四年 (1857 年) 閏五月

翼を広げた鶴が地上近くまで舞い降りてきているさまが画面上部に大きく描かれ、画面手前右にはもう一羽、鶴が描かれています。
 広重が得意とする極端なクローズアップの手法が用いられていて、鶴の羽の部分にはこまやかな空摺りがほどこされています。

題名にある蓑輪、金杉、三河島は、江戸の北の玄関口にあたる千住宿の手前で、奥州街道の両側に広がる地名です。

このうち三河島は田んぼや湿地が広がり、毎年十月から三月頃まで鶴が飛来したとされ、冬には歴代の将軍による鶴御成（つるおなり）と呼ばれる鷹狩りが行われました。

三河島は鶴を飼いならす飼付場の一つで、人間や野犬が入りこんで鶴を驚かさないように監視人を置いたといわれています。

鶴に餌付けして、人に慣れた頃に将軍一行が現地におもむき、鷹匠が鷹を放って鶴を捕まえました。捕えた鶴は塩詰にして朝廷に献上したり、江戸城で吸い物にして御膳に上がったりしたそうです。

ここでは、三冬の季語「鶴」を詠んだ句を選びました。

くわうと鳴きくるると鳴きて田鶴（たず）舞へり

大橋桜坡子（おおはし おうはし）（1895-1971）

2. びくにはし雪中 (びくにはしせつちゅう)

『名所江戸百景』 百十五



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:100_views_edo_114.jpg

百十五. びくにはし雪中 | 安政五年 (1858 年) 十月

「びくにはし」は比丘尼橋と書き、尼僧の格好をした私娼（ししょう）たちの宿が何軒かあったことに由来します。

京橋川が外堀に出る河口に架かっていた橋で同じ京橋川を題材にし、前回の「季語に遊ぶ」でも紹介した「京橋竹がし」より二つ西側の橋です。

画面左の店には大きな「山くじら」の看板があります。

これは猪肉を意味します。

江戸時代には獣肉を食することは禁忌（きんき）とされていたため、あくまで鯨肉と主張するため「山くじら」と称して猪の鍋などを提供していました。

画面右手に見えるのは焼芋の屋台で、看板の「〇やき」「十三里」は「栗（九里）より（四里）うまい十三里」という洒落です。

焼芋の香りに誘われてか、犬たちが集まってきたようです。

雪には雲母摺（きらずり）がほどこされ、やわらかな光を発しています。

広重の亡くなった翌月の改印（あらためいん）があるため、二代広重の作とする説もあります。

ここでは猪の肉を葱、豆腐、白滝などといっしょに味噌で煮込む三冬の季語「牡丹鍋（ぼたんなべ）」を詠んだ句を選びました。

同じ灯をみんなで浴びる牡丹鍋

岩淵喜代子（いわぶち きよこ）（1936-）

3. 山下町日比谷外さくら田 (やましたちょうひびやそとさくらだ)

『名所江戸百景』三



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:100_views_edo_003.jpg

三. 山下町日比谷外さくら田 | 安政四年 (1857 年) 十二月

山下町から日比谷御門の外側、および外桜田と呼ばれる桜田門外側を望んだお正月の風景です。画面手前の山下町には門松が飾られ、その門松の間に見えるのは竹を描いた羽子板、画面右端にも歌舞伎の女形を描いた押し絵羽子板が見えます。

中空には花びらの形をした羽根が高く打ち上げられています。これは神社などに植えられている無患子（ムクロジ）という黒く固い木の実に羽根が付けられたものです。

羽子をつきそこねると、顔に墨を付けられるので、下手な子は墨だらけになってしまいます。羽子板と羽根によって画面の外で女の子たちが遊んでいるのが連想されます。天高く揚がった奴風、遠くは喧嘩風の糸が絡んでいます。

奥に見えるのは、江戸城を取り囲む堀と佐賀藩主鍋島家の立派な大名屋敷。朱塗りの門は将軍家の娘が嫁いだという証です。御堀に沿って雲母摺がほどこされていて、キラキラとした輝きが水辺の美しさを伝えています。

ここでは新年の季語「羽子板（羽子）」を詠んだ句を選びました。

羽子日和続き続けり続けかし

松本たかし（まつもと たかし）（1906-1956）

4. する賀てふ (するがちょう)

『名所江戸百景』 八



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:100_views_edo_008.jpg

八. する賀てふ | 安政三年（1856年）九月

駿河町は通りの正面から堂々たる富士の雄姿を望むことができ、江戸随一の絶景ポイントでした。駿河町という名称自体が、富士山が駿河国にあることに由来しています。

富士山は 3,776 m という日本一の高さを誇る山とはいえ、江戸の町から約 100 k m 離れていて、この絵のように巨大に見えることはありません。

しかしながら富士山は江戸の人々にたいへん親しまれていた山でしたので、江戸の繁栄の象徴としてこのような誇張も違和感なく受け止められていたのでしょう。

富士山と町の間に漂う雲は空間の隔たりを省略する表現で、浮世絵に限らず、日本の絵画にしばしば見られる手法です。

その富士山を背景に店を構えたのが呉服商三井越後屋です。

それまでの、後日掛け払いによる商いから、即日現金払いにすることで、その分安価で取引を行う「現金掛値なし」という新商法を生み出しました。

駿河町には、越後屋の商標を染め抜いた暖簾（のれん）が下がり、通りの左右に「呉服物品々」「太物類品々」の立て看板が並んでいます。

商品ごとに店先を分けて絹織物や綿織物を扱うなど、買い物のしやすい店構えの工夫も江戸っ子の心をとらえました。

越後屋の人気は富士山にも劣らぬものとなり、往来は多くの人々で賑わっています。

現在は三越と名称を変え、同じ場所で百貨店を営んでいます。

ここでは新年の季語である「初富士（はつふじ）」を詠んだ句を選びました。

初富士の正装白衣（びやくえ）黒ばかま

平畑静塔（ひらはた せいとう）（1905-1997）

5. 亀戸梅屋舗 (かめいどうめやしき)

『名所江戸百景』 三十



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Hiroshige_Pruneraie_%C3%A0_Kameido.jpg

三十. 亀戸梅屋舗 | 安政四年 (1857 年) 十一月

巨大な梅の木が目飛びこんできて、空には鮮やかな赤色を配して、強烈な印象を残すシリーズを代表する一図です。

亀戸天神の裏手にあった呉服商・伊勢屋彦右衛門の別荘は清香庵と呼ばれ、龍が地を這うような臥龍梅で知られていました。

その梅の木を、画面からはみ出すほど極端に拡大して描いています。

広重はこの臥龍梅を奇抜な構図で捉えることによって、梅の木を間近で眺めているような臨場感を生み出そうとしています。

枝の間からは遠くの花見客の姿が見えます。

手前のものをより大きく、遠くのものをより小さく描く誇張した遠近表現は、広重がとくに好んだ構図です。

その斬新さはファン・ゴッホをも魅了し、本作品と「季語に遊ぶ」でもとり上げました「大はしあたけの夕立」を模写したことでも知られています。

ゴッホは日本にあこがれ、他にも多くの浮世絵を見ていたようで、例えば「タンギー爺さん」の背景には歌川国貞や溪斎英泉の美人画が描かれていますし、広重の「東海道五十三次名所図会 石薬師」も模写されています。

ここでは初春の季語「梅」を詠んだ句を選びました。

梅咲いてまたひととせの異国かな

ジャック・スタム (Jack Stamm) (1928-1991)

英文は plums blossom
 another year
 another country

私も山くじらの絵から一句詠ってみました。

肝胆を照らせば熱し牡丹鍋

白井芳雄

今回は「冬から新年、初春に観たい広重の名所絵と俳句」をお届けしました。

全体を通じての参考文献、出典：小池満紀子・池田芙美著

『広重 TOKYO：名所江戸百景』（講談社）（2017 年）

ISBN978-4-06-220507-8

太田記念美術館監修 日野原健司・渡邊晃文

『広重 名所江戸百景』（美術出版社）（2017 年）

ISBN978-4-568-10495-0 C3070

安村敏信監修

『広重「名所江戸百景」の旅 あの名作はどこから描かれたのか？』（平凡社）（2014 年）

ISBN978-4-582-94568-3

飯田龍太・稲畑汀子・金子兜太・沢木欣一監修

『カラー版 新日本大歳時記 愛蔵版』（講談社）

ISBN978-4-06-128972-7

『角川俳句大歳時記 夏』（角川学芸出版）

ISBN4-04-621032-X C0392

参考サイト：フリー百科事典ウィキペディア (Wikipedia)

最後までお読みいただきありがとうございました。

(株)技術情報センター メルマガ担当 白井芳雄

本メールマガジンのご感想や本メールマガジンへのご意見・ご要望等 melmaga@tic-co.com まで、
どしどしお寄せ下さい。

株式会社 技術情報センター 〒 530-0038 大阪市北区紅梅町 2-18 南森町共同ビル 3 F

TEL : 06-6358-0141 FAX : 06-6358-0134 E-mail : info@tic-co.com